

伊勢物語の研究

—資料編—

中 田 武 司

序 説

文学史的にいう平安時代は延暦一三年（七九四）に桓武天皇が和氣清麻呂の建議によって長岡京から山城国葛野郡宇太野に遷都され、そこを平安京となされてより、源頼朝が征夷大將軍となつて相模国鎌倉に武家政権を開いた建久三年（一一九二）の約四百年のことである。この四百年の歲月はいわば王朝期の最盛・衰退の両時期でもある。

外来文化を常套手段として生まれた古事記・日本書紀・万葉集・更に懷風藻の時代から脱皮しようとする努力がみられるのである。この脱皮の現象はややもすると外来文化の排撃という奇異な雰囲気を生んでいる。しかしこの雰囲気はこの期の人をして日本在来の文学的素地を発掘させまた能力を十分に發揮させた、その基となる一つに仮名の発展と女文の成文化がある。

仮名文の成生は、それまで口承として伝えられて来た説話や物語りを容易に散文化する機能を生むようになった。今日残っている数多くの文学的作品資料としての文献の中には、ややもすると真名文では書き残され難かつたであろうものもあるにちがいない。

71

しかし、特に和歌と物語りはこの恩恵に浴していたものといえよう。

今日「文学」のジャンルで律しられるものでも当初はむしろ「宗教」的に重きをなし、その故で発展し文学的に純

化したものが多い、この発展過程を知るとは特にこの期の文学を理解する上に必要な点でもある。

女文の発展に基盤をおくとこの時代は前期を巫女女房文学の時代、後期を女房文学の時代と区分することもできる。^(注1)

伊勢物語は丁度この中間期に生まれた物語りといえる。即ち、伊勢物語の女性は、女房であって女房でなく、かといって完全な巫女でもない面を多くもって描かれている。その性格もすべて目に訴える美的表現としての仮名であることも相手伝って優雅さを一歩増している。

その表記には仮名文字を用いながらも、内容は表記程に発展しないのが文学の常である。

この期の和歌や物語には美的形体であるべき点において自然と難解な表現法も間間あるもののそれでも難解な表現を嫌う傾向を示す所が目につく。一首の和歌の表現にしても万葉調から古今調への変遷がある。その中でも、もっとも著しい変遷は古今集における物語的な説明の現われともいえる。

伊勢物語と古今集との関係は後述するところだが、いずれにしても、こうした仮名による和歌の説明のある一部分が、説話的物語と次元を同じうした時に、伊勢物語の如き「歌物語」が構成されるようになるものと考えられる。

こうして生まれ展開された伊勢物語は形を整えるに従って「女房」の教育意識と合致し雪達暦式に物語化され文学的に純化されてゆく。^(注2)

一方において、伊勢物語の素材は「語部」という職業人―巡遊伶人―によって別面を發展させられる運命にも晒されることもあったにちがいない。現存の伊勢物語中の民間伝承の体をなす部分はこの観点において考えなければならぬ。

伊勢物語の和歌や説話などは万葉集や、記紀のそれと比べるといかにも現代風に洗練された諸要素が目につく、例

えば記紀において純化されつつ未完成だった律文の中での歌の文学化や、万葉集が、歌と叙事との間にあって十分に同化しえなかったものを伊勢物語は散文という形の中で律文を純化してしまっている。

伊勢物語は身分階級の表現においても意識しつつも次元を一つにしている。特に天皇・齋宮・親王などから女房・男・女・人などにわたって表わされている背景は極めて広い。それでありながらも、勢語の形体は内容的には極めて短かいものである。

この「内容が豊富でしかも背景の広い」表現こそ伊勢物語の地とするところであるが、この素地は単に物語文学における規範となったのみならず世界文学の短篇文学として要求される極を示しているものともいえる。

古くより「歌人必読の書」といわれて来たこの伊勢物語は諸々の問題を含んでいる。特に現代に直接合わない倫理の多くは伊勢物語における原型としてのモラリティであるものが多いし、反面社会からの逃避という感覚は現代にも合通する文学観でもある。

伊勢物語は仮名表現において目に訴える一方音読されたものであろうこともその文体から容易にいうことでもある。この点においては散文にして散文にあらざる表現の妙味というべき国語表現体を示している。

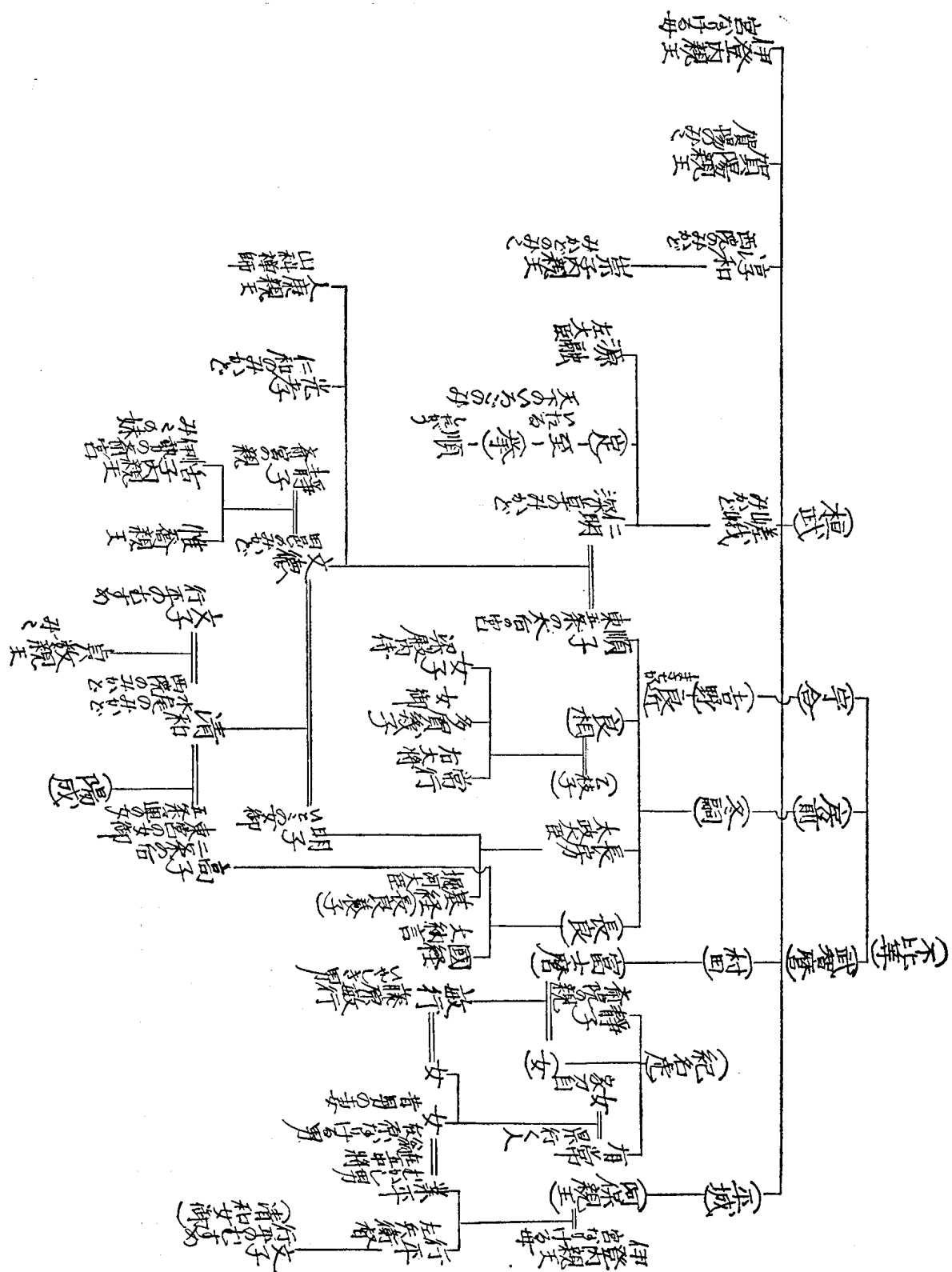
伊勢物語に生涯をかけた先哲学者も数多い。その歴史の中にあって今後更に詳しく考究する糧として本稿では人資料ⅤとⅧ研究Ⅴの部に分けてまとめてみた。今回は枚数の関係でその一部の掲載となったが、まずその中、「Ⅰ」伊勢物語における人物関係系図「Ⅱ」伊勢物語の内容の分類「Ⅲ」伊勢物語の登場人物―男・女―を概略的であるが示して研究資料としたい。なお「Ⅰ」については皇室略系譜、諸氏略系譜、尊卑分脈その他を、「Ⅱ」については天福本系統の架蔵本伊勢物語（伝青蓮院宮尊鎮親王之筆）に定家本系統、大島本系統、塗籠本系統等を校合した拙著「伊勢物語の研究」の校合の中天福本系の百二十五段本によって分類した、なお表中の古今集の書本は嘉録本（尾上

八郎校訂)を用いた、なお系図表および表中の各部分について必要な場所にはそれぞれの注をおいた。

注1 高崎正秀博士は「物語文学序説」の中で 一、巫女文学の時代、二、女房文学の時代、三、隠者文学の時代、四、庶民文学の時代の四期に分類され詳論されている。

なお、今日、日本の歴史の時代区分の方法としては文芸史(区分) 宗教史(四) 文化史(二) 精神史(二) 政治史(七) 社会経済史(六) 法制史(四) 風俗史(二) その他(二)の三三の多岐に時代区分がなされている。

注2 女房の原型については折口信夫博士、日本文学啓蒙、日本文学史ノートⅡに詳しい。なお、女房の教育意識については拙稿「女房文学序説」―かけろふ日記を中心に―(白梅紀要創刊号)でもふれた。



〔二〕 伊勢物語の内容分類

伊勢物語章段					
5	4	3	2	1	登場人物
昔男 あるじ 番人(兄達) 二条の後	人(昔男) 東五条の大 後の宮	昔男 二条の後 (帝)	昔男 女	昔男 女はらか ら	伊勢物語中の和歌 ○印は業平集に見える ()内は物語中の番号 伊勢物語に關係あ る古今集中の和歌 ()印は類歌
(6)人しれぬ	(5)月やあらぬ 篤志の人	(4)思ひあらば 昔男	(3)おきもせず 昔男	(1)かすがのの 昔男 (2)みちのくの 昔男	
昔男 人しれぬ	業平	業平	業平	業平	物語の場 所、時な ど
業平	業平	業平	業平	業平	
東五条の辺	東五条の西 の対 正月十日 翌年の正月	男の家	西の京 やよひの一 日	奈良の京 春日の里	自然描写 など
	梅の花ざか り		雨ふる日	狩	
兄達は藤原国経と基経	大后の宮・藤原冬嗣の女 ・五条皇太后順子、仁明 天皇の皇后	二条の後、藤原長良の女 高子、清和天皇の后とな り、陽成天皇を生む、 (帝)・清和天皇	正三位行中納言平の第五子 は四品阿保親王の弟 八日卒、五十六歳 元慶四年(八八〇)五月二 在原朝臣・平城帝裔 在原業平・阿保親王流の 昔男に表現されてい	昔男に表現されてい	国史等に記載されてい る年譜など
忍び恋 築地のくずれ	人・心ざしふかか りし(昔男) あばらなる板敷	二条の後(ただう どの時) ひじきも	女・(西の京の)か のまめ男 物語らひいて	うるかうぶり しのぶずりの狩衣 みやびをなむしけ る男	
					表現、語辞 注など

11	10	9	8	7	6
友昔 達男	女女昔 の父・母男	渡人修友昔 守者行者男	友昔 男	昔 男	昔女(男 (二条の 后)女 いとこの女 御堀河大臣 国経大納言
(16)わするなよ	(15)わがかたに	(13)名にしおは ば	(9)しなのなる	(8)いとどしく	(7)しら玉か
昔男	(14)みよしのの女 の母 (昔男)むこがね	昔昔昔昔 男男男男	昔男	昔男	昔男
		唐衣			
		唐衣			
		業平			
東の方	武蔵国 人間郡(埼 玉県)吉野 里	三河国八橋 駿河の国宇 津の山 富士山 (比叡山) (塩尻) 武蔵国 下総国 隅田河	(信濃の国)	伊勢、尾張 の海岸	芥川という 河 あばら蔵
空ゆく月	雁	河がくもで に流れてい る かきつばた 薦・かえで 五月下旬 雪都鳥	浅間の嶽の 煙	白浪	雷、雨降り
					二条の后がいとこの女御 藤原良房の女明子(梁殿 の后文徳天皇の女御・清 和天皇の母)のところに 仕えていた時のこと 堀河大臣・昭宣公藤原基 経・貞観十四年(八七二) 八月・右大臣兼左大将に任 ぜらる三十七歳
「友だちども」	女・(武蔵国の女) 母は藤原氏の出 むこがね 「をこす」(よこす) 人の国	人・(京なる) 乾飯 友・ひとりふたり に 住むべき国もとめ わびあふ 鹿の子まだら すずろなる目 込題 「かきつばた」の	東下り 友・友とする人ひ とりふたり	東下り	よばふ 鬼ある所 足ずり

16	15	14	13	12
紀有常 (三代の帝) 有常の妻 姉の尼 友だち	妻(昔男)	女 昔男	女 男	昔男 人の女 人守
(24)手ををりて (25)年だにも (26)これやこの (27)秋やくる	(23)しのお山	(20)なかなか (21)夜もあけ (22)栗原の	(18)武蔵あぶみ (19)問へばいふ	(17)むさしのは
有常 友だち (業平)	男通ひける	女 昔男	女 男	女
		き(をくろさ		は(かすかの
		東歌・みち のくうた		読人しらず
世かはり 時うつる 有常の妻が 尼になり姉 の尼のここ ろへ行く	陸奥国	陸奥国 栗原郡(宮 城)	武蔵国	武蔵野
		夜ふかき時 きつ、くた かけ		
紀有常・正四位下名虎之 子也(三実)、元慶元年(八 七七)六十三歳にて歿、 有常の娘は業平の妻有常 の妹は惟喬親王の生母 三代の帝・仁明(103段) 文徳(77段)清和(103段) 天皇(水尾帝)御母藤原 良房女明子(三実)、治世 十九年貞観十八年(八七 六)十二月二十九日讓位、元 慶四年(八八〇)十二月四 日崩去、三十一歳(65段)。 世のうつりかわり・天安 二年(八五八)文徳帝崩御 の後皇子惟喬親王(有常 の甥)が即位せず第二皇 子惟仁親王が即位したこ と				
時にあふ 心うつくし 夜のもの	妻(人の) えびすごころ	女・陸奥国なる 桑子、玉の緒 (20)の歌は万葉集 (三〇八六)に類歌 ひなびたる、あは れよろこばひて	男・(武蔵なる) 女・(京なる) 「武蔵鑑」 手紙	昔男(盗人) 人の女・(盗まれ たる)、火つける 人・(道来る)

22	21	20	19	18	17
女 男	女 昔 男	女 昔 男	男 人 宮 昔 仕 男 の 女	男 女	ある 人 じ
(46)(45)(44)(43) 秋 秋 あ う の の ひ き 夜 の み な の の て が は ら	(42)(41)(40)(39)(38)(37) (36) 中 忘 忘 今 人 思 ば い 空 る 草 は は ふ で て に ら ん と て さ ひ い な	(35) (34) い 君 が た め つ の 間 に	(33) (32) 天 雲 の 雲 の	(31) (30) 紅 に 紅 に	(29) (28) け ふ こ ず は あ だ な り と あ る じ
女 男 男 女	女 男 男 女 男 男 女	女 男	男 女	男 女	男
	と (忘れなむ 読人しらす		り 天雲の (ゆきかへ 業平		けふこずは 業平
女の家	男の家	京大三月 和	宮中	菊の花の盛 りをすぎた 時期	桜の咲いて いるあるじ の家
水の流れ	玉かづら 草のたね たちる雲	葉かえでの紅	天雲 山の風	白 雪	雪 桜の盛
			宮仕の女・梁殿の後の御 事也(直解)		
千夜をひと夜に はかなし	昔男・(昔男女) かしこく思ひかは すけしう(怪しう) ながめをる まく(撒く) ありしよりけ をのが世々 うとし	女・大和にある女 よばふ	女・宮仕の女 人・御達なりける 男・また男ある	女・なま心ある女 歌よむ女 心見むとて 枝もとをを	人・(年ごろおと づれざりける) あるじ・(昔男)

35	34	33	32	31	30	29	28
人 (昔男)	人 昔男	女 昔男	(昔男) 女	女房達 男	女 昔男	女御 (昔男)	(昔男) 女
(69) たまのをを	(68) いへばえに	(67) こもりえに	(65) いにしへの	(64) つみもなき	(63) あふことは	(62) 花にあかぬ	(61) などてかく
(昔男)	昔男	女 昔男	(男)	男	昔男	(男)	(男)
					あふことは		
					読人しらず		
男↓女	男↓女	津国菟原郡		宮中の女房達の局の前	男↓女	東宮の女御の花の賀	男の家
		あしべ		草葉			
		満ちくる潮		忘草			
						東宮の女御・二条の後高子、賀・四十歳からはじまる年齢の祝賀	
(69) 玉の緒 沫緒 むすぶ 人の歌は万葉集 (七六三) に類歌	人・(つれなかりける) つれなし	田舎人 (66) の歌は万葉集 (六二四) に類歌	しづのをだまき 女・かつて関係した女に数年たってから	あた さが	玉の緒 づらき心 女・僅かにしか逢わなかった女	女御・(東宮の)	女・色ごのみなる 女で男をみすてて 出で行った女 あふご

39	38	37	36
西院の帝 崇子(内 親王 男 源至 (源順)	紀有常	女 昔男	女 (昔男)
(76)いとあはれ (75)ばいてていな	(73)君により (74)ならはねば	(71)われならで (72)ふたりして	(70)谷せばみ
至 男	有常 (昔男)	女 昔男	(男)
崇子内親王 の葬儀の夜	紀有常のと ころ	女の家	
		花 朝顔	峯 玉かづら
西院の帝・淳和天皇(桓 武天皇第三皇子)、治世 十一年、天長十年(八三 三)二月二十八日讓位、 讓位後西条の北、大宮の 東の西院におられた 承和七年(八四〇)五月八 日崩去、五十五歳 崇子・承和十五年(八四 八)五月十五日薨、十九 歳。 源至・嵯峨天皇の孫源定 の子、源順の祖父 順・源順、永観元年(九 八三)七十三歳で歿、梨 壺の五人の一人、和名抄 の著者とも天曆五年 (九五二)後選集の宣旨 を賜わる			
はふり(葬)の夜 ほいなし	恋	女・(色好みなる 女)うしろめたし下紐 (72)の歌万葉集(二 九一)に類歌	女・(問ひごとし ける)玉かづら(三 七〇)の歌万葉集(三 五〇)に類歌

45	44	43	42	41	40
親 娘 昔 男 男	男 家 人 刀 自	* 人 女 賀陽の親王	女 昔 男	男 女 姉妹 (いやし き) 男 (あてな る) 男	翁 親 女 若 男
(85) 暮れがたき (84) ゆく螢	(83) いでてゆく	(82) いほり多き男 (81) なのみたつ女 (80) ほととぎす人(男)	(79) いでてこし 昔 男	(78) むらさきの あてなる 男	(77) いでていな 男
		(の) ほととぎす 読人しらず (いくばく 藤原敏行)		むらさきの 業平	
		女の家	男の家	女の家 十二月の下 旬	女の家 その日の入 相から翌日 の戌の時
娘の家	(京↓田舎 の男の任地)	女の家		袍(うえの きぬ)を洗 う 武蔵野の心	
夏の螢 秋風 涼しき風 の雁	ものやみに なる籠る 死ぬ晦日 六月の夜 暑い頃	ほととぎす 五月のたお しでのたお さ いほり		女姉妹・有常がむすめど もなり、賤しき男は藤原 の敏行なり、あてなる男 は業平なり(知顯抄)	
	県へ行く人・紀有常とも	賀陽の親王・桓武天皇第 七皇子・貞観十三年(八 七一)十月薨		緑衫(ろうそう) の袍	女・(けしうはあ らぬ女) 思ひもぞつく すまふ 親・(女の親) 血の涙 絶え入る 願たつ いき出でる すける物思ひ 翁・(老人のいみ)
親・(娘の) 悲しき あそび かしづく	腹にあちはふ 盃 はなむけ 人・(県へ行く人)	人・(男) ※人・(昔男) 田長 たのむ	うしろめたし さはること		

52	51	50	49	48	47	46
人 昔 男	人 昔 男	人 昔 男	妹 昔 男	人 昔 男	女 昔 男	友 昔 男
(98) あやめかり	(97) 植へしうへ ば	(96) ゆく水と (95) ゆく水に (94) 吹く風に (93) あさつゆは (92) 鳥の子を	(91) はつ草の (90) うら若み	(89) 今ぞしる	(88) おほぬさと (87) おほぬさの	(86) めかるとも
昔 男	昔 男	昔 女 昔 女 昔 男 男 男	妹 昔 男	昔 男	昔 女 男	昔 男
	ば 植へしうへ	ゆく水に		今ぞしる	おほぬさの おほぬさと	
	業平	読人しらす		業平	業平	
男の家	人の家	男の家↓女 の家	男の家	昔男の里を 旅立つ人 を送る場	男の家	任地↓京
あやめ 沼、野 雛子	前栽 菊・秋	鳥の子 朝露 吹く風 去年の桜 ゆく水(流 水)散る花	寝よげ 若草 はつ草		ひく手あま たよる瀬	
				人・紀利貞が河波介にま かりける時(古今) 紀利貞・常陸助真人の孫 貞守の子、大内記、麻呂 の後裔		友・紀有常、紀名虎の子 左兵衛尉、雅楽介、元慶 元年(八七七)正月十三 日卒(公卿補任)
人・(粽をくれた 人・(刈・狩) かり わびし	前栽 菊 人・(前栽のある 家人)	人・(不満を訴え ている女) 十づつ十 この世 人の心 あだくらべ おとこ(男)をん な(女) 忍びありき	おかしげなり 結ぶ めづらし ことのほ	馬のはなむけ	あだなり つれなし 大幣	人の国(他国) 文の心 思ひわぶ 人の心 めかる おもかけ

59	58	57	56	55	54	53
昔 男	男 女 ども	人 昔 男	昔 男	女 昔 男	女 昔 男	女 昔 男
(108)わがうへに (107)住みわびぬ	(106)うちわびて (105)むぐらおひ (104)あれにけり	(103)こひわびぬ	(102)わが袖は	(101)思はずは	(100)行きやらぬ	(99)いかでかは
昔 男	男 女				昔 男	昔 男
わがうへに	あれにけり					
読 人 し ら ず	読 人 し ら ず					
京の東山	長岡の家 その隣の家 いなか 田宿	男の家	男の家	(男の家)	男の家	女の家
山 里 水 そ ぎ 露 天 の 河 川 舟 の 櫓 戸 し ず く	いなか 鬼のすだく 穂ひろい 田面	藻 われから	草の庵、露		天つ空 露	鳥(鶏) 夜中
舟・櫓 生(顔) きい で る 宿、死 に 入 る	鬼宿 れ す き も の を と つ 田刈り 田面 ともなき女ども らなる女で「こ 女ども・(「宮ば 男・(色好みなる 男・(色好みなる	人・(つれなき) 海人刈		このは 女・(思ひかけた る)	女・(冷淡な女) 夢路 たのむ	女・(あいがたき 女・ 物語 あふ

64	63	62	61	60
(女) 昔男	子(三人) 男 女	男主人	女 昔男	人 祇承の官 家刀自 昔男
(117) とりとめぬ	(115) さむしろに	(113) これやこの	(111) 名にしおは	(109) さつきまつ
(女) 昔男	女 男	昔 昔男	女 昔男	昔男
	さむしろに			さつきまつ
	読人しらず			読人しらず
(男↓女) (女の家)	夜 その宵 男の家 狩の道中 女の家	人の国 夜 男とあるじ もとの女	筑紫 (たはれ島)	京↓他国 宇佐の使 宇佐郡宇佐 町
あやしき 吹く風 玉すだれ	夢がたり かいまみる 百歳 いでたつけ しき 茨・からた	桜花、涙 年月ふる 衣 捨ててにげ	色め河 浪衣 濡衣	橘 五月 香をかぐ 袖の香 山
	在五中将・「業平をいふ 在原氏にて阿保親王の第 五の男なればかくいへる なり」(愚見)		筑紫・九州地方の古称 是も宇佐使の時の事也(肖 聞抄)	宇佐・筑前の国宇佐の八 幡へ一代に一度使を立て まつらるる事あり(愚)
みそか(密) 玉すだれ	あはれが寝る 衣がさむしろ、	女・(世ごころつ ける女・つくも髪 男・(在五中将) たよりなし 夢がたり 夢はす・(夢のや うを占へあはすこ と也)(新)	色好み すきもの 女・(簾のうちな る人)	昔男・(宇佐の使) 心もまめ 家刀自・(男から 逃げて行き祇承 (しぞう)の官人の 妻になった女) 女あるじ、かわら け、さかな

68	67	66	65
昔男 ある人	昔男 同士	昔男 兄・弟 友達	女 大御息所 男 主殿寮 陰陽師 巫 帝
(125) かりなきて	(124) きのふけふ	(123) なにはづを	(118) 思ふには (119) 恋せじと (120) あまのかる (121) さりとて (122) いたづらに
昔男	昔男	昔男	男男 女女 男男
			(思ふには) 読み人しらず (恋せじと) 読み人しらず あまのかる 藤原直子
			いたづらに 読み人しらず 地の流罪の 女の家(蔵) 水の尾の御 男の家 時 虫(わかれか)
和泉の国 住吉郡住吉 里住吉浜 海辺	和泉の国 二月の国 河内国 生駒山 朝↓昼	津波の浦 難波の浦 三津	宮中 曹司 女里 男家 男家 藻
秋菊・春 ゆくの花 おりゐつつ	木雪雲み曇りみ晴れ 木の末	舟 渚	色 沓 御手洗川 神・仏 かほかたち 流し遣す
			色・青色(天皇)、赤色 (太上天皇)、黄丹色 支子色(皇太子以下無品 親王) 大御息所・天皇の母、こ こは染殿后明子いとこ ・清和天皇高子帝・清 和天皇、「天皇風儀甚美、 端嚴如神」 好読書伝、潜思釈教こ (三実)(16段) 流し遣す・(東山にこも りて居けるをかくいふと いへり)(愚) 水の尾・清和天皇「山城 水尾に御隠遁有りし也。 御廟もいま其山にあり」 (直)
雁	雪・雲 同士・(思ふどち)	あはれがる しる所	女・(宮仕えで色 ゆるされたる女大 御息所のいとこ) 大御息所・(染殿 の后とも五条の後 とも) 男・(在原なりけ る) 「かたはなり」 「かたはなり」 「わらふ」 「かたはなり」 「はらひ」かなし みそぎ 宿世 しおる 刈る、う らむ、笛 おかし あはれ うたふ

74	73	72	71	70	69
女 昔 男	女 (昔男)	女昔 (男伊勢の国)	女斎昔 (男宮の仕女)	斎宮の童 昔男	親女 昔男 小童 *人 国守 (水尾天皇) (文徳天皇) (惟喬親王)
(134) いはねふみ	(133) 目にはみて	(132) おほよどの	(131) 恋しくは (130) ちはやぶる	(129) みるめかる	(128) さかの (128) かち人の (127) かきくらす (126) 君やこし
男	(男)	女	男 女	昔男	昔男 女 昔男 女
					君やこし (かきくらす) 読入しらず
					業平
男↓女	男の家	伊勢の国 (大淀)	伊勢の斎宮 神の斎垣	狩の使より 帰る 大淀の辺	伊勢の国 斎宮の所 伊勢へ来て 二日目の夜 子一つ↓丑 三つ 狩 尾張の国
山	月、桂	松		みるめ (海松布) あまの釣舟	狩の使 月のおぼろ 夢 心の暗 夢うつつ 血の涙 続松の炭
	桂・「月中有桂樹」(淮南子)				狩の使・「狩をさせんがために、勅使をたてらるる事」(拾) 斎宮・貞観元年十月五日の条に「ト定怡子内親王・為伊勢斎二(三実) (斎宮の母は紀名虎の女・静子で、斎宮は惟喬親王と同母) 水尾天皇・清和天皇 (65段) 文徳天皇 (77段)
歌 (134) の歌は万葉集 (二四三三) に類	月 (133) の歌は万葉集 (六三三) に類	うらむ	130 の歌は万葉集 (二八六三) に類 大宮人 いさむる	大淀の辺・(三重県気多郡) 刈る、棹	昔男・(使実) 狩の親・(伊勢の斎宮) いたはる「ねんごろなり」*人・(自分の使いの人)「いたつく」女・(伊勢の斎宮) なりける 人目 いぶかし 夢 杯 国守・(斎宮の頭を兼任している) 128 の歌連歌体

77	76	75
田 女 人 藤 行 翁 邑 御 々 原 の 常 の 帝	二 翁 条 の 後 人 々	昔 女 男
(140) 山 の み な	(139) お ほ は ら や	(138) 涙 に ぞ (137) い は ま よ り (136) 袖 め れ て (135) お ほ よ ど の
翁	翁	男 女 男 女
	お ほ は ら や 業 平	
安 祥 寺 法 事 堂	* 氏 神 小 原 の 小 塩 緑 山	男 の 国 (伊 勢 国) 大 淀 の 浜
捧 げ も の 木 の 枝 山 春 の 心 ば え		み る か ら み る 袖 ぬ れ る 海 人 わ た つ 海 し ほ か ひ 涙 (目) し づ く
順子・安祥寺・弘法大師の御弟 子・真雅僧正の時、五条后 御にたつたのは嘉祥三年 (八五〇)七月 而為女御(三実) 天皇仁寿初選入掖庭 第一女也少有三雅操 子者右大臣從二位良相之 朝臣多可幾子卒、多可幾 十四日辛未從四位下藤原 崩去、二年(八五八)十一月 安祥寺・弘法大師の御弟 子・真雅僧正の時、五条后 御にたつたのは嘉祥三年 (八五〇)七月	田 邑 の 帝 ・ (文 德 天 皇 御 母 藤 原 冬 嗣 女 順 子) (文 実) 治 世 九 年 、 天 安 二 年 (八 五 八) 八 月 二 十 七 日 崩 去 、 二 年 (八 五 八) 十 一 月 安 祥 寺 ・ 弘 法 大 師 の 御 弟 子 ・ 真 雅 僧 正 の 時 、 五 条 后 御 に た つ た の は 嘉 祥 三 年 (八 五 〇) 七 月 而 為 女 御 (三 実) 天 皇 仁 寿 初 選 入 掖 庭 第 一 女 也 少 有 三 雅 操 子 者 右 大 臣 從 二 位 良 相 之 朝 臣 多 可 幾 子 卒 、 多 可 幾 十 四 日 辛 未 從 四 位 下 藤 原 崩 去 、 二 年 (八 五 八) 十 一 月 安 祥 寺 ・ 弘 法 大 師 の 御 弟 子 ・ 真 雅 僧 正 の 時 、 五 条 后 御 に た つ た の は 嘉 祥 三 年 (八 五 〇) 七 月	氏 神 ・ (藤 原 氏 の 祖 神 は 天 兒 屋 根 命) 翁 ・ (業 平 は 五 十 余 歳 で 右 近 衛 府 中 将 と な る) 二 条 の 后 (春 宮 の 御 息 所 と 申 し た 時) 翁 ・ (近 衛 府 の) * 氏 神 は 京 都 府 乙 訓 郡 大 原 野 村 に あ る 大 原 野 神 社 人 々 ・ (禄 た ま は り た る) 御 車
あはれがり	みまそかる 捧げもの 女御・(多賀幾子) 藤原の常行(右大 将) 翁・(右馬の頭) 安祥寺・京都府山 科にある寺 講	なぐ つれなし 涙

78	
多賀幾子 藤原常行 山科の禪 師の親王 ある人 随人 舍人 人々 右馬頭	
(141)あかねども 右馬頭	
安祥寺 七七の法事 夜の御座 (三条の大石 御幸) (紀の国の 千里の浜) 島	
滝おとし 水走らせ 千里の浜 色岩 青苔	
山科禪師・仁明天皇第四 皇子、御母藤原冬嗣女順 子、人康親王、法名を法 性山科宮、又北野親王 (紹) 三条御幸・観・桜花・喚 文人賦三百花亭詩・また 貞観八年(八六六)三月 二十三日西三条右大臣藤 原朝臣良相の百花亭に (三集)貞観十四年(八 七二)五月薨(三実)	る寺なり(愚) 藤原常行・右大臣良相嫡 男、貞観八年(八六六)十 二月十六日任右大將、 天安二年(八五八)十一 月七日清和天皇御位につ かせ給ふ日、從五位上を 授たまふ、右近衛権少將 兼周防権守これ当官な り(臆) 右馬頭・右馬頭從五位上 (官位令)、頭一人掌下左 閑馬調習養飼供御乗具配 給穀草及飼部戸口名籍 事上(職員令) 業平は貞観七年(八六五) 三月九日より同十七年正 月十三日まで右馬権頭
多賀幾子・(女御) 藤原常行(右大將) おもしろし 「たばかり」 石 ある人・(御曹司 のまへの) 御曹司 島 すずろなり 蒔絵歌 心	

81	80	79
左大臣 親王たち 翁 みかど	人 ※人	親王 *翁 行平 (むすめ) 時の人
(144)しほがまに	(143)ぬれつゝぞ	(142)わが門に
翁	人花植へたぬれつゝぞ業平	翁
陸奥の国 塩竈 夜あけ 夜ひと夜 十月末	おちぶれた 家 三月末日 雨ふる日 春	産屋
賀茂河の六 条の家 十月末 紅葉 朝なぎ 釣	藤の花	(夏・冬)
左大臣・母大原全子源融 嵯峨天皇第十二の御子貞 観十四年(八七二)八月 二十五日に大納言より左 大臣に任ず寛平七年(八 九五)八月二十五日薨、 七十四歳 みかど・嵯峨天皇、治世 十五年、弘仁十四年(八 二三)四月十六日讓位承 和九年(八四二)七月十 五日崩御、五十七歳 かたる翁・乞食翁の意で 「業平自称」(新釈)		氏・(在原氏)貞観十八年 (八七六)三月、貞数為 親王、(陽成帝第八皇子) 年二歳、母更衣文子(三 実)・(文子は行平の女) 翁・祖父は行平、その弟 の業平を祖父方といった もの 行平・天長三年、在原姓 を賜わる、寛平七年薨 八十二歳 阿保親王の第 二子、母桓武帝皇女伊登 内親王(三実)
酒のみ 遊ぶ かたる 翁・(かたる翁) 板敷舟 あやし おもしろ し みかど・(わがみ かど)	人(藤の花植へた る人昔男) 藤の花植へたる ※人(女の人) 年のうち	親王・(氏の中に 生れた) 氏の中 歌 「時の人中将の子 となむ」 *翁・(祖父方なる 業平のこと) むすめ・(行平の)

84	83	82
母 昔男	惟喬親王 馬頭	惟喬親王 右馬頭 人 御供なる 紀有常
(154) 世の中に (153) 老いぬれば	(152) 忘れては (151) まくらとて	(150) をしなべて (149) あかなくに (148) ひととせに (147) 狩りくらし (146) 散ればこそ (145) 世の中に
母 かの子	馬頭 馬頭	右馬頭 人 右馬頭 紀有常 紀有常 右馬頭
老いぬれば (世の中に)	忘れては	世の中に (のこりな く)
業平の母み	業平	業平 読人しらず
長岡と子の 仕える京の	惟喬親王の 住居(水無 瀬)頃へて 宮(御室) 秋の夜 三月末 正月 小野 比叡のふも と 夕暮	惟喬親王の 住居(山崎 のあな水崎 無瀬)交野 の渚の院 日暮 天の河 宮 夜ふけ 十一日の月
	草 結ぶ 雪	桜 狩 枝を折る 野 月 峯
母・桓武天皇第八皇女伊 登内親王、業平の母、貞 観三年(八六一)九月薨	小野・小野宮址惟喬親王 の幽栖なり(地名辞) 比叡・比叡山のこと、山 上に天台宗山門派の総本 山延暦寺あり	惟喬親王・文徳天皇第 一皇子、母・紀名虎女静子 貞観二十四年(八七二)七 月、二十九歳で出家、寛 平九年(八九七)二月二 十日薨、(勢語闕疑)号 小野宮(要記)水無瀬宮 (編年記) 山崎・乙訓郡山崎訓也 末佐岐、古く難波と対比 された要津で国府がおか れた(日本後記)別名河 湯(カヤ)嵯峨帝の離宮 のあった場所 水無瀬・遊獵の地(撰津 志)後鳥羽院の離宮のあ ったところ 交野・延暦六年(七八七) 十月天皇行幸交野(続日 本紀)
身はいやし 母・(宮なりける) 宮仕へ ひとつ子	八瀬 小野・今の京都市 公事・なきなき いにしへのこと つれづれ 雪：たかし ぐしおろす 大殿ごもる ながるす つかはす いぬはす 御おくりす 馬頭・(翁)	水無瀬・大阪府三 島郡本町広瀬 酒 やまと歌 交野の渚・今の大 阪府枚方市大字渚 かざし うき世 杯 のたまう たなばたつめ 宿 物語 あるじ 酔ふ 山の端

91	90	89	88	
男	人 (昔男)	人 男	友だち (昔男)	女 も 女のこど
(165)をしめども	(164)桜ばな	(163)人しれず	(162)おほかたは	
昔 男	(昔男)	昔 男	ひとり (なかの)	
			おほかたは	
			業平	
夕暮 男の家 三月末	夜 明日 ものごし	男の家 友だちども 集りて	男の家	河辺 家 その夜
春	男の家↓女桜 句ふ	友だちども 集りて	月	浪いとたか し 翌朝 海松かしは
男・(月日のゆく をさへなげく昔 男)けふの日	おもしろし桜 夜 心ばへ	男・(つれなき人) つれなし おもひ わたるものごし あはれなし 疑は かぎりなし	月 老い	けふかあすか 亡宮内卿・(もち よし) わらふ めづ 螢火 浮海松 女のこども・(そ の家の) 高坏 かしは 女・(その家の主 婦) 161の歌万葉集(四 二〇〇)に類意歌 渡つ海 田舎人 藻

96	95	94	93	92
兄 女 昔 男	女 男 二条の後	女 子 男 昔 男	人 昔 男	女 (昔男)
(171) あきかけて	(170) ひこぼしに	(169) ちぢの秋 (168) 秋の夜は	(167) あふなあふ な	(166) あしべこぐ
女	昔 男	女 昔 男	昔 男	(昔男)
頃 六 男 女 月 十 家 家 五 日	関 天 二条の後邸 の 河 ものごし	秋(春) 女 男 の 家 女	男の家	男女の家 (葦辺)
で あまのさか 紅葉 秋風吹く 暑さ(瘡) いは木	逢ふ ひこぼし	紅葉 霞 霧 秋の夜		
	二条后・(3段参照)			
石木、心くるし あはれ かさ 口舌 兄・(女の) かえでの紅葉 あまのさかで のろひごと むくつけし	五十四の歌万葉集(一) 恋めづ るかす おぼつかない 仕えはすよばふ 男・(二条の后に 昔男)	すむ (女にできた 別の男) もの(便り) 物をこす 女・(昔男との間 は子ある仲の女で 絵をかき女) ろうずむかふ	世思ひことわり 思ひおぼろけ 臥すおぼろけ になし思ひかく 人・(になき人) 身・(賊し)	こひしさ 来つつかへる 消そこ 棚なし小舟

101	100	99	98	97
在原行平 藤原良近 あるじの はらから 太政大臣	昔男 人	男 女	男 太政大臣	堀河大臣 翁
(177) 咲く花の	(176) 忘草	(175) 知るしらぬ (174) みずもあら	(173) わがたのむ	(172) さくら花
(昔男)	昔男	女 男	昔男	翁
		知るしらぬ みずもあら	き (かぎりな	さくら花
		読入しらぬ 業平	読入しらぬ (左注 前大臣)	業平
行平の家 よみはてが た	後涼殿の間 御局	右近の馬場 のひをり (五月五・ 六日) 今日	太政大臣邸 九月	堀河大臣の家 九条の家 四十の賀
よき酒をさ 瓶に花をさ す 藤の花 花のしなひ (房) 三尺 六寸 咲く花 藤のかげ 栄花のさか り	忍草 忘草	車の下簾	梅のつくり 枝 雉 折る花	さくら花 曇る 老いらく
左兵衛督・左兵衛府長官 在原行平・貞観八年(八 六六)三月八日備前権守 在原朝臣行平為左兵衛督 (三実) 藤原良近・神祇伯、風貌 清美、無学以政理見推正 三位吉野之第四子、貞観 十六年(八七四)在中弁貞 観十七年卒(三実)七十 五歳(大日本史) 太政大臣・藤原良房	後涼殿・在清涼殿西 (和名)	右近馬場・右近衛府に属 する馬場で一条より大宮 の方にあたった ひをり・五月五日は舍人 六日は右近衛の舍人の真 手結といひ内裏の馬場で 騎射をした日(袖中抄に 祥しい)	太政大臣・(忠仁公)藤原 良房 天安元年(八五七) 二月太政大臣天安二年 十一月摂政となる、清和 天皇の外祖父、梁殿後の 父(歳五十一)臆断、五 十四(歳五十一)換物)	堀河大臣・藤原基経(6 段参照) 四十の賀・基経の四十の 賀は貞観十七年(八七五) にあたる 四十の賀を初 老といふ
在原行平・(左兵 衛の督なる) うへ(殿上) 藤原良近・(左中 弁)まらうどさね (あるじのはらか ら(昔男)あるじま うけ(あるじ) すまひ 栄花のさ かり(藤氏のこと) そしる	人・(やむごと なき) やむごとなし 忘草 忍草	車 ほかかなり 恋し あやなし 知る わく 誰 男・(中将なりけ る)	男・(仕うまつる 昔男) 梅のつくり枝 雉 たのむ 時 かしこし おかしがる 禄	四十の賀 翁・(中将なりけ る) さくら 道

107	106	105	104	103	102
昔男 人 藤原敏行	昔男 親王たち	昔男 女	人 男	昔男 深草帝 人親王たち	昔男 女
(185) かずかず (184) あさみこそ (183) つれづれの	(182) ちはやぶる	(181) 白露は	(180) 世をうみの	(179) ねぬる夜の	(178) そむくとて
男男 てか(女)は(女)り	昔男	女	男	昔男	昔男
つれづれの敏行	ちはやぶる業平			ねぬる夜の業平	
業平					
昔男の家 涙河	竜田河のほとり	男の家↓女の家	賀茂の祭見物やゆかし	宮中	京↓山里
袖雨 蓑笠	竜田河のほとり 水いからくれな	玉 白露消	海みるから物見車	夜夢 まどろむ	雲
内記・中務省に属し詔勅 宣命を作り位記を書いた 文官職で、大内記、中内 記、少内記があつた。藤 原敏行・母は紀名虎の女貞 観の子、母は八六七、少 記、九年(八六七)に大内 記に任ぜられた			賀茂の祭・京都賀茂神社 の祭(陰暦四月の中の酉 の日に行なわれ葵祭とも)	深草帝・仁明天皇、治世 十八年嘉祥三年(八五〇) 三月二十一日崩御四十一 歳、山城深草山に葬奉さ れ深草の御門と称す	
昔男・(あてなる) 人・(男のもと) りける(男) よさふ(男) おさし(男) じま(男) づま(男) めひ(男) れいのひづの身なむ	せうえう ちはやぶる 竜田河からくれ ない	死ぬ消 なめし こころざし	人・(尼になれる 斎宮) かたち やつす ゆかし 歌海人 たのむ 見さす(止める)	まめ きちよう あた 心あやまり 夢 かなし きたな げ かなし 人・(女の人)	歌世の中 女・(尼になりた る斎宮) 思ひしる 思ひう んず 女・(もと親族の)

113	112	111	110	109	108	
昔 男	女 昔 男	(人) 女 昔 男	女 昔 男	友だち 昔 男	男 女	
(194) ながからぬ	(193) すまのあま の	(192) 恋しとは (191) 下ひもの (190) いにしへは	(189) 思ひあまり	(188) 花よりも	(187) 夜ゐるごとに (186) 風ふけば	
昔 男	昔 男	昔 女 昔 男 男	男	昔 男	男 女	
	すまのあま			花よりも		
	読人しらず			紀茂行		
男の家	男↓女 須磨の海人	男の家↓女 下紐	女↓昔男	男↓友人	女↓男	
	塩焼き 煙風 なびく		夢 夜深く	花	風吹く 浪岩 かはく 田蛙水 雨蛙	
やもめ 忘る心 命	ねむごろ 女・(契りける) ことざま 塩焼き煙 いたむなびく	女・(やむことな き) (やむことな なくなる 甲ふ 人・(なくなつた 侍女) 恋ふる 解く かたる	女・(男ひそかに かよふ) 夢魂 魂むすび	友だち・(人を失 へる) あたこふ	恨む衣手 ことぐさ蛙 田	文箱 見わづらふ さいはひ 問ひが たしは 義 笠

119	118	117	116	115	114
男 女	昔 男	帝 (御神)	人 昔 男	女 男	仁和の帝 (昔男)
(201) かたみこそ	(200) 玉かづら	(199) むつまじと (198) われみても (御神)	(197) なみまより	(196) おきのゐて	(195) 翁さび
女	昔 男	(昔男)	昔 男	男	(昔男)
かたみこそ	玉かづら	(われみても)		おきのゐて	
読人しらず	読人しらず	読人しらず		小野小町	
女の家	男↓女	住吉行幸	陸奥の国 京(へ文に て)	陸奥の国 (沖の井) (都島)	芹川に行幸 鷹飼
かたみ	かづら、 はふ木	住吉、岸の ひめ松 白浪、瑞垣	波間 小島の浜	馬のはなむ け 身をやく 別れ	鶴
		帝・或説に、文徳天皇、 天安元年正月に住吉に行 幸し給ふといへれども、 史などに所見なければ、 (愚見抄) 住吉・住吉神社のあると ころ今の大阪市住吉区		小野小町・流布本古今集 の墨滅歌にみる歌	仁和の帝・光孝天皇、治 世四年、仁和三年(八八 七)八月二十六日崩去、 五十八歳、小松天皇、 (扶桑正統記)とも。 仁和二年(八八六)十二 月、行幸 芹川野(三 実)仁明天皇の第三皇子 この時五十七歳、しかし この仁和二年は業平没後 七年に当たると。
男・(あだなる男) あだなる かたみ 忘る	音す、玉かづら こころ、うれしげ	行幸 住吉 ひめ松、いく代 神、現形す 瑞垣 いはふ	すずろ、惑ふ、 人・京に思ふ人 ひさし、逢ふ 197の歌、万葉集 (二七五三)に類歌	男・女(陸奥の国 の)いぬ(帰る) 馬のはなむけ 沖の井 酒飲む、 身をやく 別れ	似げなし、行幸、 つく(就任)鷹飼 摺狩衣の袂、さぶ とがむ、狩衣 鶴、おほやけ(天 皇)気色、ききお ふ

	125	124	123	122	121	120
	昔 男	昔 男	女 昔 男 男	人 昔 男 男	人 昔 男 男	人女昔 男 男
	(209)つるにゆく	(208)思ふこと	(207)野とならば (206)年をへて	(205)山しろの	(204)うぐひすの (203)うぐひすの	(202)あふみなる
	昔 男	昔 男	女 昔 男 男	昔 男	人 昔 男 男	昔 男
	つるにゆく		ば(野とならば)年をへて			
	業平		読 業 人しらず 平			
	男わづらふ きのふ けふ		男↓深草に すみける女 野(深草野)	男↓女	梅 壺 宮 中	近江 築摩の祭
	く心地死ぬべ		鶉深草 狩野	井 手 たま水	雨うぐひす 花笠ひす ぬるめぬる	鍋
					梅壺・清涼殿の西北にあ る、凝花舎のこと、庭に 梅の木があった	築摩の祭・近江にある築 摩神社の祭、四月一日に 行なわれる(鍋祭とも)
	わづらふ 死ぬ 道 きのふ けふ	ただ ひとし	女・(深草にすみ ける)あきがためづ 里 狩 歌	人・(契れること あやまれる女 人)契りあやま る手たま水 むすぶ たのむ 甲斐	人・(女の) ぬれる まかり づる縫ふ 笠ぬい るめる 着す お もひ乾す	世へる、しのぶ 人(他の男) つれなし、鍋、 かず

〔三〕 伊勢物語の登場人物

男性 (32～38名)

昔男	74章段	
昔	25章段	二名
昔男と明らかなもの	15章段	
昔男を他の表記で示すもの	8章段	
帝その他 (() 内の数字は表現回数を示す)		
帝 (8)		五名
親王 (親王たち) (10)		七名
個人名で示されるもの		六名
友 (友だち)		三～六名
その他		九名

女性 (36～38名)

女	十一種	六名
后・斎宮その他		
后・斎宮		七名
個人名で示されるもの		四名
人と表現する女性	五種	六名
親	二組	
国名を冠する女性		四名
その他	五種	五名

(不定多数の海人などを除く)

以上より男性32～38名、女性36～38名、合計68～76名の登場人物を推量することができる。

(詳しくは専修国文、「勢語人物攷参照」)